

「セ・ロム」はゲーテの人柄をナポレオンにして「セ・ロム」(これぞ、人間だ!)と言わしめた伝説の言葉。
「エッセイの森」は面白く、有意義な読み物(木々)がたくさん集まり、森の如く知の緑を成す(SDGs)ことを意味する。

ジョークサロン会員/リレーエッセイ⑤

歴史を学び、ロマンを味わう

前回の駄洒落話題を離れ、筆者の最近の趣味である歴史の話題述べてみたい。

★★★歴史で決断と教訓を学ぶ

次の2つのテレビ番組は秀逸である

①英雄たちの選択

歴史を大きく変える決断をした英雄たちの「脳内」に深く分け入ってその時なにを考え、何に悩んでひとつの選択をしたのか。崖っぷちでの選択を迫られた英雄の「葛藤と決断」に迫る番組である。

②偉人・敗北からの教訓

偶然の勝利はあれど、敗北は必然。日本の歴史を彩った偉人たちはいかにして敗れていったのか。敗北の裏に隠された「過ち」と「原因」の紐解きの番組。敗れた者から学ぶ「人生教訓」。

★★★歴史とは何か

①歴史とは、韻を踏むもの

歴史は「繰り返す」と言われるが、正確には同じことが「反復」するのでなく「類似」のことが起こるとされる。即ち「韻」を踏むのである。限られた期間内での一致があつたとしても、長期的に同じ帰結を招くかは誰にも予測し得ない。

歴史も駄洒落も「韻」を踏む(笑)。

②歴史とは、勝者が描くもの

基本的には、歴史とは戦いに勝つたものが、自分たちを「正当化」するためのもので、負けた方は「悪」という図式になる。先の大戦の東京裁判は、戦勝国が日本を裁

判したものである。戦勝国が自分の戦いを「正当化」のために実施したのだ、との主張があると聞く。この検証は今生きている我々の責務である。

③歴史とは、言いがかりばかり

家康の言いがかりの事例

①三河一向一揆の和睦条件

一揆を起こした寺側の和睦条件は「寺を元の通り」とすること。家康はこの条件を曲解して自分の都合良く解釈した。

「元の通り」とは寺を作る前の「野原」だとの「言いがかり」。なんと寺を完全に破壊して「野原」としてしまつたのだ。

②ライバルの二人に謀反あり

まずは前田利長(利家の息子)に謀反の「言いがかり」で脅して臣従させた。次のタゲットは上杉景勝。謀反討伐軍を編成し大坂を留守した。反家康派をあぶりだそうとしたのだ。その結果、目論見通りに「関ヶ原の戦い」となつた。

③方広寺の鐘銘事件

「国家安康」「君臣豊楽」の碑文は家康の名前を分断し、豊臣家の再興を意味して徳川家を呪詛しているとの「言いがかり」。豊臣家が受け入れられない解決条件を突きつけ「大坂の陣」に追い込んだ。

秀吉の言いがかりの事例

①小田原城の北条征伐

群馬原で真田家との領土問題に関して「言いがかり」をつけ、小田原城を包囲。北

条家を百年5代で滅亡させた。

②秀次の殺害の顛末

秀吉が謀反の疑いありと、秀次に「言いがかり」をつけると、秀次は抗議のため、身の潔白を証明しようと自らの命を絶つてしまった。想定外の秀次の自害に狼狽した秀吉は、秀次の謀反が実際にあつて、秀吉は謀反人の秀次に切腹を命じたとの史実を捏造した。更に諸大名に見せしめるため、秀次の家族の皆殺しを公開処刑とし、秀次の居所の聚楽第も完全に破壊し、秀次と親しい大名をも厳しく尋問した。この苛烈な対応は側近の石田三成が担当したと言われる。

残つたのは老人の秀吉と幼児の秀頼。そして諸大名の豊臣家と三成への不信任感。苛烈な対応が豊臣家を滅亡へと導いた。

★★★狂気の戦場へペリリュー島

戦後70年の節目にあたり、先の天皇皇后陛下が慰霊に訪れ、平和を祈念された、パラオの島である。筆者はこの島を二度訪問して戦争遺跡を訪ねた。

①ペリリュー島の戦いの概要

狭い島(縦9キロ・幅3キロ)にあつた日本の飛行場の争奪を巡り、日米の約5万人が74日間の壮絶な戦いを展開したのだ。瓶の中に二匹のサソリが入れられ殺し合いを余儀なくさせられたような格好。どちらが先に死ぬのか、逃げ場のない接近戦。狂気の戦いだった。

②戦術の大転換。持久戦の導入の意味

大本営は万歳突撃による無益な「玉砕」を禁止。「持久戦」で敵に損害を与え、足止めさせることに転換した。米軍の艦砲射撃を洞窟で堪え、上陸する敵に無謀

な突撃することも、敵に投降することも許されず、最後まで徹底抗戦した結果、日本の戦死者は1万人となり生存者は僅か34人であつた。戦争の不条理を教えてください。島である。

③日本の持久戦とアメリカの新兵器
日本は長期持久戦で最後まで徹底抗戦するつもりだと初めて悟つたアメリカ。洞窟に潜む日本兵なんて丸ごと焼き尽くしてしまえと最新鋭の殺戮兵器の「火炎放射器」と「ナパーム弾」を投入した。この兵器は硫黄島・沖繩戦で更に大規模に使用された。この殺戮兵器は日本の都市を焼き尽くす「焼夷弾」に引き継がれて民間人を巻き込む戦いへと激化した。そうした容赦のなき戦いの「原点」がこのペリリュー島の戦いであつた。

.....
歴史を学び、面白い駄洒落を考える。そんな趣味の「二刀流」をキープして残りの人生をエンジョイしたい。

著者プロフィール

柴本 和夫



ジョークサロン会員
金鳥という名の会計を担当
昭和27年長野県生まれ
1975年 一橋大学商学部卒
都市銀行勤務で大半を本都部の経理部門を担当。駄洒落好きでお堅い銀行マンとの二刀流。
返還直前の香港に5年の勤務を経験。
会社退職後の趣味は旅行と歴史。
現在は戦国時代の城巡りが生きがい。